入唐僧・空海が日本にもたらしたもの

川﨑一洋
Kawasaki Kazuhiro

真言宗の開祖であり、傑出した思想家・芸術家であった空海。唐の新しさを日本へ移入し、どのように曼荼羅的な独自の密教思想をつくりあげたのか。博学的な知識と類まれなる好奇心、内外のネットワークをもとに、言語、美術、書、教育、土木技術など、ソフト・ハードの両面において文化の翻訳に従事した空海の事績から、その方法論を学ぶ。

かわさき・かずひろ
1974年生まれ。高野山大学大学院博士課程修了。博士（密教学）。専門は密教史、仏教図像学。ネパールやチベットの各地でフィールドワークを重ねる。現在、四国八十八ヶ所霊場第28番大日寺住職。高野山大学非常勤講師、高野山大学密教文化研究所委託研究員、国立民族学博物館共同研究員。著書に『弘法大師空海と出会う』（岩波新書）、『四国「弘法大師の霊跡」巡り』『弘法大師に親しむ』（以上、セルバ出版）、『最新四国八十八ヵ所遍路』（朱鷺書房）などがある。

嘆願書をしたためる

艱難の身を亡ぼすことを知れども、しかれどもなお、命を徳化の遠く及ぶに忘るるものなり。〈その道程が困難で、時として命を落としてしまう危険があることを知りながら、遠く聞き及んだ皇帝陛下の徳に触れたい一心で、死の恐怖を忘れてやって参りました。〉

（中略）

猛風に頻蹙して葬を鼇口に待ち、驚汰に攢眉して宅を鯨腹に占む。

〈大風が吹けば、恐ろしさに顔を顰め、自分の屍が海亀の餌になってしまうことを覚悟しました。大波が寄せれば、驚いて眉を寄せ、海に放り出されて鯨の腹の中に呑み込まれてしまうことを思いました。〉

（中略）

乍に雲峯を見て欣悦極まりなし。赤子の母を得たるに過ぎ、旱苗の霖に遇えるに越えたり。

〈突如として陸地に聳える高い山が見えた時には、喜びのあまり感極まってしまいました。その喜びたるや、赤子が母に会って胸に抱かれた時の喜びよりも、旱魃で枯れゆこうとする苗が雨を得た時の喜びよりも、はるかに大きなものでした。〉

これらの文章は、弘法大師・空海が記した書簡の中でも名文として知られる、「大使、福州の観察使に与うるがための書」からの抜粋である。

延暦23（804）年8月10日、空海を乗せた遣唐使の船は、1ヶ月余り海上を漂い、九死に一生を得て福州長渓県の赤岸鎮に流れ着いた。しかし、天皇の国書を携えていなかった一行は、船を封鎖されたあげく、砂浜に建てた仮屋で50日にも及ぶ待機を強いられたという。

そこで、唐の言葉に巧みであった空海が、遣唐大使の藤原葛野麻呂に代わって筆を執り、入国を請う嘆願書をしたためた。それが、前掲の書簡である。

教養に満ちた、格調高い空海の文章は、福州の役人たちを感服させ、一気に事態の打開へとつながった。空海の、鮮烈な国際舞台へのデビューである。

さて、かくのごとく入唐を果たした空海が、仏教に関するもの以外に、日本へ何をもたらしたのか。本稿では、その一端を紹介しながら、宗教家としてではなく、「文化人」としての空海が残した功績について考えてみたい。

入唐までの半生

空海は、奈良時代の後期、宝亀5（774）年に誕生した。父の名は佐伯直田公という。佐伯氏は、讃岐の多度郡（香川県善通寺市のあたり）に蟠踞した有力な豪族であり、氏寺を所有していたことが知られていることから、空海が仏教に慣れ親しんで育ったであろうことは容易に想像できる。母は、阿刀氏の女。阿刀氏は、学問によって朝廷に仕えた知識階級の名門で、宿禰の称号を得て畿内に居住していた。

真魚と呼ばれた幼少時の空海に関する詳しい記録は残されていないが、「貴者」あるいは「神童」と噂されるほどの秀才であったと伝承されている。

15歳になった空海は、上京して母方の舅である阿刀大足の許で、「藻麗」すなわち漢詩文を読むための学問を本格的に始めることになる。大足は、桓武天皇の第三皇子、伊予親王の個人教師を務めた人物として知られている。そして18歳の時、最高学府であった都の大学に入学する。中国の古典を修める明経道を専攻した空海は、将来25歳までに登用試験に合格すれば、官吏への道が約束されていた。

しかし空海は、仏門を志して大学を去り、出奔してしまう。24歳の時に、儒教、道教、仏教を比較し、仏教が最も優れていることを論じた『聾瞽指帰』を著して以降、31歳で入唐するまでの空海については、虚空蔵求聞持法という密教の修法に出会い、それを実践したということ以外、謎に包まれている。

真如様式の弘法大師像
空海は唐より密教を日本に持ち帰っただけでなく、そこから独自の翻訳技法を用いて日本の文化的母体を築いた万能の天才だった。
所蔵／室生寺（写真提供／飛鳥園）

この空白時代の空海については、私度僧となって、吉野や紀伊、四国などの各地で山林斗藪の修行に没頭したことがクローズアップされることが多いが、それ以上に、奈良の諸大寺を訪ねては仏典を読みあさり、すでに日本に入っていたいくつかの密教経典に触れて、その内容に関する疑問を抱いていたに違いない。

奈良時代、ペルシャ人の役人、破斯清通が活躍したことが知られているように、平城京は国際色豊かであった。空海は経典を研究する傍ら、鑑真和上とともに来日し、唐招提寺に住していたソグド人僧の如宝や、入唐留学より帰国した大安寺の戒明などを訪ね、唐の仏教事情について伝聞し、そこに密教を学ぶことへの憧れを募らせていたであろう。そして彼らを通じて、唐の言語の修得にも努めていたはずである。

延暦23（804）年、そんな空海に入唐のチャンスが巡ってくる。前年に派遣された遣唐使船がすべて難破してしまったため、再挙する遣唐使のメンバーとして、空海が臨時採用されたのである。空海がその出発の直前に、国が認める官度僧となるための得度の儀式を、急遽受けたことが知られている。

なお、一介の私度僧であった空海が、なぜ遣唐使の一員になり得たのか。それについては、伊予親王が後ろ盾になったとか、藤原葛野麻呂が通訳として推薦したなどの仮説がある。実際に空海は、冒頭で取り上げた入国を請う嘆願書のほか、唐の隣国の渤海国の王子に宛てた書簡などの代筆を葛野麻呂から依頼されており、後者の説が有力と思われる。いずれにしろ、空海の出色の才能と強い求法の意志が、奈良の仏教界や親族など、空海の周囲を動かしたのであろう。

飽くなき探求

ようやく入京が認められた空海は、11月3日に福州を発ち、昼夜を隔てぬ強行軍で、12月23日に長安（現在の西安）に到着した。

シルクロードの起点にして、東洋のメトロポリスであった、唐の都・長安。その城郭は、東西10㎞、南北9㎞の規模を誇ったという。遣唐使の一行は、碁盤の目のように整備された城内の、宣陽坊という区画の官舎に2ヶ月ほど滞在した。宣陽坊は、ひときわ賑やかな東市の西に位置し、そこからは、長安のシンボルともいえる大雁塔も望めた。

この2ヶ月の間にも空海は、華やかな長安の市井を探索し、仏教以外の多彩な知識を吸収したものと思われる。のちに嵯峨天皇を喜ばせることとなる、高名な詩人の作品や書跡の逸品を旺盛に蒐集したのも、この時期のことであろう。また、文人墨客を直接訪ねては、詩文や書の技法を熱心に学んだであろうことは、空海が著した漢詩文を作る際の手引書『文鏡秘府論』の序文に見られる「長じて西泰（中国）に入り、粗、余論を聴く。」の言葉や、嵯峨天皇に劉希夷の詩集を献上した際に添えられた上表文にある「余、海西（中国）において頗る骨法（書の技法）を閑えり。いまだ画墨せずといえども、稍、規矩（筆法の規則）を覚れり。」という表現によって裏付けられる。

藤原葛野麻呂たちが朝貢の任を果たして帰国の途についた2月11日、空海は西市に近い延康坊にあった西明寺に居を移した。そこで大師がまず始めたのは、梵語のマスターであった。西市の北に位置する醴泉寺に住んでいたインド僧の般若三蔵や牟尼室利三蔵の門を叩き、インドの宗教事情全般についても聴聞している。北西インド出身の般若三蔵は、母方の親族にイラン系の名前が見られることから、混血の西域人であったとも考えられている。また西明寺には、カシュガル出身の慧琳という学僧がいた。空海の周囲では、梵語のみならず、西域地方の胡語も飛び交っていたことであろう。このあと登場する恵果和尚の在家の弟子であった呉殷が記した『恵果阿闍梨行状』によれば、空海は「梵漢差うことなし」すなわち、インドの言葉と中国の言葉を同じように自在に操ったといわれる。

そしていよいよ、青龍寺の東塔院に、運命の師である恵果和尚を訪ねる日がやってくる。恵果は、唐土に本格的に密教を定着させた不空三蔵の後継者で、代宗、徳宗、順宗の三代の皇帝からも厚い帰依を受け、その許には、アジア各地から千人もの弟子が参集していたといわれる。

恵果は空海と対面するや否や、私はあなたをずっと待っていたのだと大いに歓喜し、すぐに受法の準備を整えるよう空海に告げる。かくして6月には密教の伝授が始まり、8月には、空海を伝法阿闍梨、すなわち密教の正統な指導者として承認するための、灌頂の儀式が開かれた。恵果から皆伝を得たのは、数多の弟子たちの中で、空海を含む2人のみであったといわれる。

伝法を終え、経典、法具、曼荼羅などを空海のために用意した恵果は、「早く日本に帰って密教の教えを人々の幸福のために役立てよ」と遺言し、その年の12月に入滅する。その遺命に従うべく、空海は、20年と定められていた留学期間をわずか2年に短縮して、帰国することを決意する。

そこへ偶然にも、高階遠成が率いる臨時の遣唐使がやって来る。空海はすぐに遠成に宛てて申請書を提出し、帰国の許可を得た。このように、空海の入唐求法には、奇跡ともいうべき幸運がいくつも重なった。

漢詩を贈り合うなど、短い時間で知友たちと別れの挨拶を交わした空海は、思い出深い長安をあとにし、806年の8月に明州の港を出帆。再び怒涛を越えて故国を目指した。なお、空海の探求心は止むことを知らず、帰路の途中で立ち寄った越州でも、仏典はもとより、詩賦（文学）、碑銘（歴史）、卜医（医学）、五明（芸術）に関する文献など、入手し得る限りの書物を蒐集している。

嵯峨天皇との交流

その詳しい時期は不明であるが、空海は九州に帰着し、筑紫の大宰府に入った。大同元（806）年の10月には、請来した経典、仏具、仏画などの目録を作成し、みずからが密教の正統な後継者となったことを表明する上表文とともに、朝廷に送っている。

しかし、朝廷は沙汰を与えず、空海は3年近くの間、大宰府に留め置かれることになる。その理由については、留学期間を短縮して無断で帰国した「闕期の罪」に問われたとか、阿刀大足と関係があった伊予親王の謀反事件の影響を被ったなど、多くの推論がある。

大同4（809）年、新たに嵯峨天皇が即位すると、ようやく空海の入京が認められる。最先端の唐の漢字文化に並々ならぬ関心を持っていた嵯峨天皇は、その年の10月、空海に命じて劉義慶が撰した『世説新語』の文章を屏風2帖に揮毫させている。空海の書の才能について、すでに聞き及んでいたのであろう。なお、嵯峨天皇自身も、空海、橘逸勢とともに「平安の三筆」に数えられるほどの能筆であった。

その後、空海は頻繁に、唐より持ち帰った著名な書家の書跡や拓本、みずからが筆を揮った書を献上し、嵯峨天皇との親交を深め、厚い信任と強力な庇護を得た。そして、密教宣布の道を、確実に歩んでゆくのである。

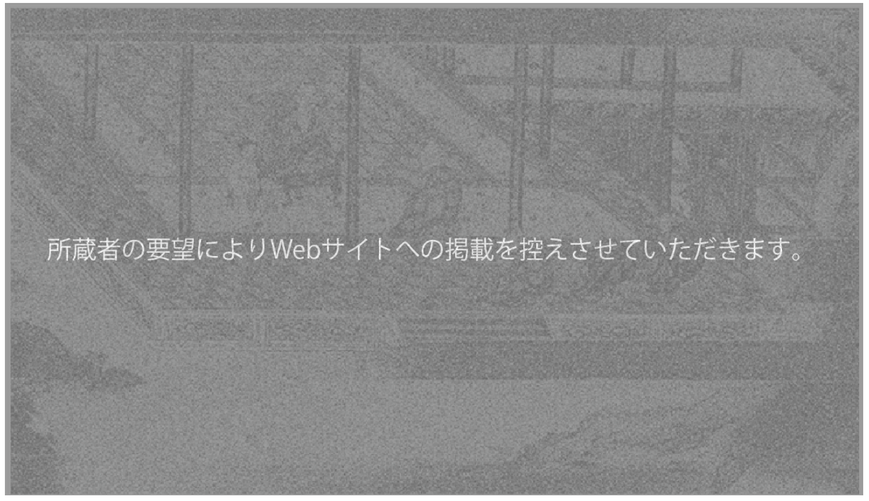
参考までに、献上された書跡などの一部を挙げれば、以下のようなものがある。

王羲之の『蘭亭碑』1巻と『諸舎帖』1首、劉希夷の『詩集』4巻、王昌齢の『詩格』1巻、褚臨王の『貞元英傑六言詩』3巻、徳宗皇帝の真跡1巻、欧陽詢の真跡1首、張誼の真跡1巻、除浩の『宝林寺詩』1巻と『不空三蔵碑』1首、李邕の真跡屏風書1帖、朱画の詩1巻、朱千乗の詩1巻、王智章の詩1巻、飛白の書1巻、『古今文字讃』3巻、『古今篆隷文体』1巻、『梵字悉曇字母並釈義』1巻等々

「飛白の書」から知られる飛白体は、刷毛書きのような独特な書体で、空海は正統派の書法に精通するいっぽう、さまざまな雑書体も本邦に紹介している。『古今文字讃』や『古今篆隷文体』は、まるで絵画のようなユニークで創造性に富む書体を、図鑑のように掲載する。また『梵字悉曇字母並釈義』は、インドの文字の解説書である。ちなみに空海は、梁の顧野王が撰した『玉篇』に依拠して、現存する日本最古の字書である『篆隷万象名義』30巻を編纂している。

さらに、唐で学んだ技術を応用して作った筆が進献されることもあった。次の文章は、弘仁3

空海入唐地図
九州を出帆した4艘の遣唐使船は、次々と遭難し、消息不明になった船もあったという。空海を乗せた船は1ヶ月余り洋上をさまよったあげく、現在の福建省北部に流れ着いた。



『弘法大師行状絵詞』
第三巻より「青龍受法」の場面
西明寺の僧たちとともに、空海が長安の青龍寺に恵果和尚を訪ねた時の様子を描いたもの。画面向かって左の童子を従えた人物が恵果で、中央の人物が空海。
所蔵／東寺（教王護国寺）

所蔵者の要望によりWebサイトへの掲載を控えさせていただきます。

弘法大師筆尺牘三通

一通目　国宝

空海が最澄に宛てた書状3通を1巻に収めたもので、最もよく知られた空海の真筆。1通目の書き出しに「風信雲書」とあることから『風信帖（ふうしんじょう）』と呼ばれる。

所蔵／東寺（教王護国寺）

『古今文字讃』

中巻

古文篆、籀文篆など、21種のいわゆる雑書体について、書体の用例を添えて解説した書物。空海が唐から日本へ伝えたと考えられている。

写真は、文亀3（1503）年に三条西実隆が世尊寺行季に書写させたもの。

所蔵／人間文化研究機構国立国語研究所

（812）年に、狸毛を使って仕上げた真書（楷書）、行書、草書、写書（写経）に用いる4種の筆を、空海が嵯峨天皇に献上した時に添えられた上表文の一部である。

筆生坂名井清川をして造り得て奉進せしむ。空海、海西において聴き見しところかくのごとし。（中略）毛を簡ぶの法、紙を纏うの要、墨を染めて蔵め用うること、ならびにみな伝え授け訖んぬ。空海、自家にして試みに新作のものを看るに、唐家に減らず。

〈筆職人の坂名井清川に筆を作らせて献上いたします。私が唐の国で見聞きした筆は、このようなものでございました。（中略）毛を選ぶ方法、紙を巻いて筆の穂を整える方法、墨をしみ込ませて穂を固める方法、すべて清川に伝授し終わっております。私も新たに出来上がってきた筆を拝見しましたが、唐の筆に劣らぬほどのよい仕上がりです。〉

空海が日本に伝えた、充実した「技術」の一端を、この一節から垣間見ることができる。

なお空海は、曼荼羅をはじめとする多くの密教絵画も請来したが、それらの修復や新調にも携わっている。また、仏像を造立することもあった。空海が、絵画、彫刻、鋳造など、多種多様な芸術を日本に伝えた立役者であったことも、書き添えておこう。

社会事業

空海がおこなった社会事業として最も人口に膾炙しているのは、満濃池の修築であろう。年間を通じて降水量が少なく、大河の流れていない讃岐平野では、灌漑用の溜池が大きな役割を担ってきた。空海の故郷である多度郡からも近い満濃池は、大宝年間（701～704）に造られたが、堤防が決壊して修復がままならない状況にあった。そこで、白羽の矢を立てられたのが、カリスマ性とマルチな才能を備えた空海であった。

讃岐の国司の発議によって、朝廷は官符を下して空海を満濃池修築の別当（責任者）に任命した。空海の徳を慕って多くの民衆が協力し、その工事は異例の速さで完了したと伝えられている。『日本紀略』が記録するところによれば、民衆は空海を父母のように慕い、空海が来ると聞けば、履物も履かずに迎えに出たという。

アーチ状の堤防や余水吐を施設するなどの、修築に用いられた土木に関する知識を、空海が唐で学んだとする伝承もあるが、それを証明する史料は、残念ながらわれわれに与えられていない。

なお空海が、教育制度を唐に倣って導入したことは、確実である。

空海は晩年になって、綜芸種智院という私立学校を開設したが、その教育理念を綴った「綜芸種智院の式」には、次のような記述がある。

大唐の域には、坊坊に閭塾を置いて普く童稚を教え、県県に郷学を開いて広く青衿を導く。（中略）今、この華城にはただ一の大学のみあって閭塾あることなし。この故に貧賤の子弟、津を問うにところなく、遠方の好事、往還するに疲れ多し。今、この一院を建てて、普く瞳矇を済わん。

〈大唐の都城では、坊ごとに勉学を教える塾があって、もれなく子供たちを教えており、県ごとに地方の学校が開かれていて、広く学生を教えている。（中略）今日、平安京には大学がただ一校あるのみで、勉学を教える塾は皆無である。このため、貧しい家庭の子弟には学問する方法がなく、学問を好む遠方の子弟は、通学に疲れ果てる始末である。そこで今、この綜芸種智院を建てて、すべての学童を救済しよう。〉

綜芸種智院は、仏、儒、道の三教を教えたため「三教院」とも呼ばれ、日本初の総合大学とも評されている。また、身分や経済力に関係なく門戸が開かれており、教師と学生の生活を保障する完全給付制が敷かれていた。

満濃池

香川県仲多度郡にある貯水量1,540万tの大規模な溜池。弘仁9（818）年に決壊し、それから3年後に空海によって修復された。

写真提供／PIXTA

ただ、その経営の実際については不明な点が多いのも事実であり、嵯峨天皇の皇后であった橘嘉智子の義兄、藤原三守によって土地と建物が寄進されたことのみが知られている。

空海が用いた翻訳技法

さて、本誌のテーマである「文化の翻訳」あるいは「思想の翻訳」ということに触れねばならない。

密教の法は、一つの容器から他の容器へ水を移し替えるように、師から弟子へ、そっくりそのまま伝えられるべきものであるとされている。そのため、空海が密教の教理自体に大きな変化を加えることはなかった。

ただ、空海が晩年に提唱した「十住心思想」では、既存の仏教の諸宗派から、インドや中国の諸宗教に至るまでを、密教を最高位に置いて十の階級に格付けしながらも、それらはすべて、密教の教主である大日如来が説いた教えであるとして、相互に主体となり得ることを認めている。これは、曼荼羅に象徴される密教の包摂主義に即したものであるが、日本人の宗教に対する寛容性にも通ずる。周知のように、日本人は古来、カミとホトケを分け隔てなく崇めてきた。

また、インド仏教の伝統では、心のある人間や動物を「有情」、心のない植物や無機物を「非情」として明確に区別するが、空海は「毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同じく平等の仏性を鑒みて」（「式部笠丞がための願文」）と述べて、毛や鱗、角、蹄や尻尾のある種々の動物たちのみならず、植物やモノもまた、宇宙仏たる大日如来の現れであると主張している。これもまた、山川草木に八百万の神々が宿ると考えた日本人の思考に合致するものである。

ここで、空海がおこなった「翻訳」の一例として、東寺（教王護国寺）講堂の仏像群を挙げておこう。

京都のシンボルでもある高さ55メートルの五重塔を有する東寺は、真言宗の総本山である。その広大な境内の中央に建つ講堂の内部には、空海の構想に基づいて造られた、21体からなる仏像群が安置されており、火災を被って復元された数体以外は、すべて国宝に指定されている。

21体の仏像のうち、向かって左側には、いずれも忿怒の表情をして蛇や髑髏の装身具を身に着け、真っ赤な火炎を背負った、おどろおどろしい姿の五大明王と呼ばれる5体の密教仏が並んでいる。これらは、空海が本邦に初めて伝えた尊像であり、その迫力が、平安の人々をさぞかし驚かせたであろうことは想像に難くない。そしてその右側（中央）には、柔和で凛とした5体の如来像が並び、さらにその右側には、慈悲に満ちた5体の菩薩像が並ぶ。

五大明王に代表される明王と称される仏たちは、強情で気性の荒い難化の衆生たちを叱咤し、力ずくで悟りの世界へ導くために、如来や菩薩が方便として現した姿である。空海は、如来、菩薩、明王、それら三様の姿を仏像に刻み、並列させることによって、密教の思想を目に見えるかたちで、具体的に示した――「翻訳」した――のである。

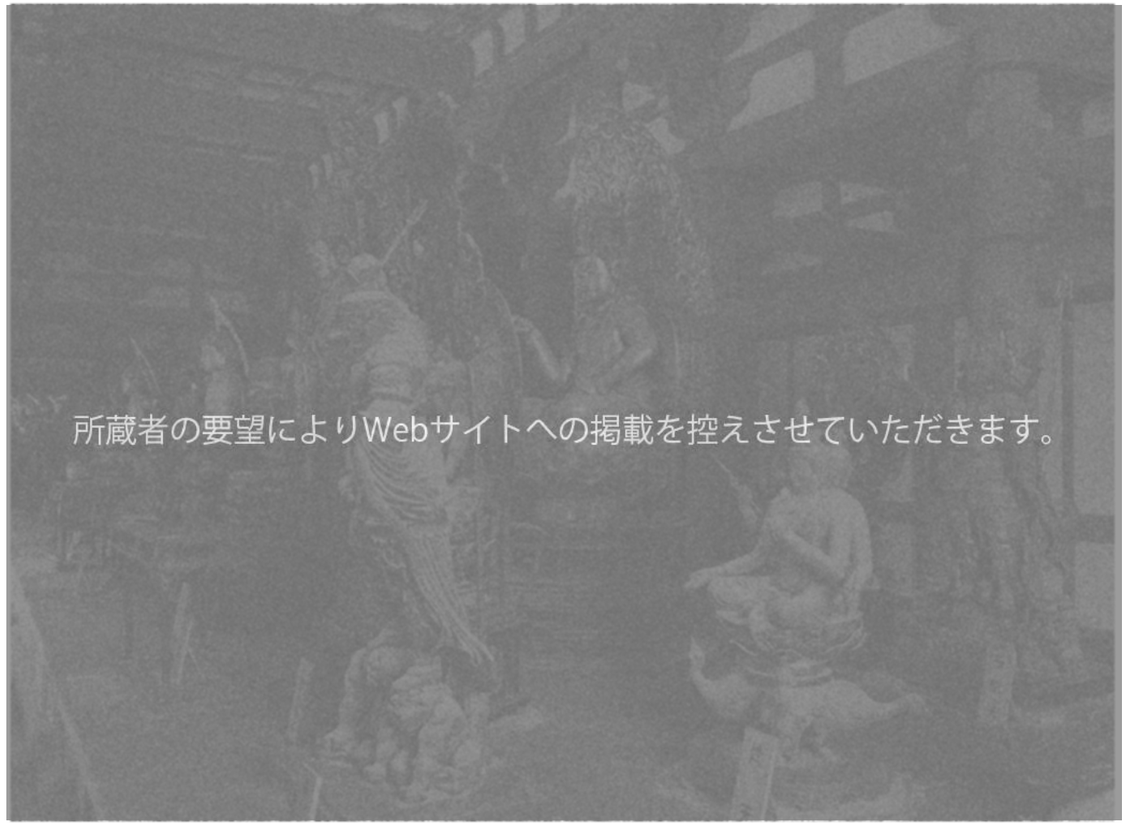
書の技法にしろ、芸術や土木の技術にしろ、理論の移入のみに留まるのではなく、目に見えるかたちで、実践をともなうのが、空海が用いた文化や思想の「翻訳技法」の特徴であり、強みであるといえよう。

＊　＊　＊

真言密教の教えを日本へ移植することに成功したのみならず、日本史上最大の「文化功労者」として、今もなお多くの人々から崇められている空海。そのバイタリティーの根源が何であったのかを示す次の一文を挙げて、拙稿を閉じることにしよう。空海が最晩年に高野山において催した「万燈会」の法要における願文からの抜粋である。

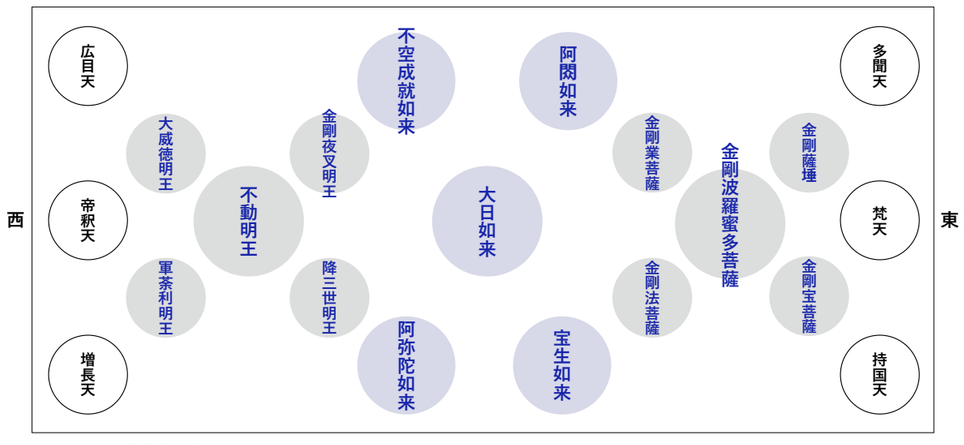
虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん。

〈宇宙空間がある限り、生きとし生けるものがある限り、すべての生命の幸福を実現するという私の願いも、永遠に尽きることはない。〉



東寺講堂の仏像群

密教の思想を可視化するために空海が考案した仏像群。
造像の背景には、「国家を安定させ、すべての生命の幸福を実現する」という空海の熱き思いがあった。
写真提供／高野晃輔



東寺講堂の諸尊配置図（現状）

向かって左（西）から、明王、如来、菩薩が5体ずつ配置されている。立体曼荼羅とも称される。
四隅からは四天王、左右（東西）の端からはバラモン教起源の帝釈天と梵天が、中央の仏たちを守護する。